

松山地方裁判所平成23年（ワ）第1291号、平成24年（ワ）第441号、平成25年（ワ）第516号、平成26年（ワ）第328号 伊方原発運転差止請求事件

意見陳述書

宮本 恵
(松山市在住)

わたしは現在、松山市内にあります宗教法人「日本バプテスト道後キリスト教会」の代表役員であり牧師をしている宮本恵といい、そこで奉職して14年目を迎えています。

日本の「原子力発電」、否、核発電は、「原子力の平和利用」という言葉の下で始まり、東西冷戦下における核兵器開発技術の確保と直結し、さらに発電後の廃棄物処理方法が確立していないその二点だけを取り上げても断念しなければならない発電方法ですが、キリスト者として、そもそも放射性物質を用いた核発電は被造物である人間が用いてはならない技術であると確信しています。核発電とは、この地球が生まれてから47億年ともいわれる途方もない歳月でようやく安定した核物質をあえて不安定化して、つまり危険な状態にして電力を得ようというものであり、この星で生きるすべての生命体を危険に晒し、そのいのちの犠牲を伴う技術に他ならないからです。しかし、この国は1954年の予算付け以来、「国策」の名の下で推進し続けてきました。

明治維新以来の国策、「富国強兵」が誤っていたことは、1945年8月15日の敗戦が示しています。同じ「国策」の核発電に、四国電力を始めとする電力各社は進んで手を挙げてきましたが、「国策だから大丈夫」「もしもの時は国が何とかしてくれるだろう」というきわめて責任性に欠けた経営判断があったと考えています。東京電力福島第一原子力発電所の大事故により核発電の推進という「国策」は、誤りであったこと、もはや誰にとっても明白です。

わたしが原子力発電と意識して向かい合うことになったのは、最初に牧師として赴任した先で出会った、地方在住の売れない作家との出会いにあります。それ以前のことから話を始めます。

わたしの母は、戦中、軍医として戦地に赴きそこで酒に溺れて依存症となった祖父の下、崩壊した家庭の中で思春期を過ごしています。今年亡くなった父は国策のもとで進められた「満蒙開拓団」に家族で応募し、命からがら引き揚げるその途中で幼い3人の妹弟たちを失いました。この二人の第一子として神奈川県で生まれたのがわたしです。母も父も明らかに「国策」の犠牲者です。その後、父は戦後の混乱の中でキリスト教信仰を得て、さらには牧師となるべく、福岡市にある西南学院に進んで神学を学び、卒業後は複数の教会で牧師をつとめてきました。つまり牧師2世となりますが、牧師という職は世襲制ではなく、またわたし自身は、就職を控えた時期も牧師にだけはなるまいとの思いで一度は東京の一般企業に勤めました。その時に通った教会の感化を受けて、結局わたしも父と同じ学校へ転じて神学を修め、1990年から牧師として立たせて頂き、現在に至っています。会社

員時代に通っていた東京の教会は、靖国神社国営化阻止に先鋭的に取り組んでいる教会でした。そもそも、わたしが属しているバプテスト (baptist) という名の教派は、信教の自由と政教分離原則を特徴の一つとしています。ですから、戦前の国家神道の復活につながり、戦いの犠牲者を英霊と呼んで国が利用する靖国神社国家護持は、信仰に照らして認められないことなのです。

退職後、大学に復学して神学を学んだ後に1990年にわたしが赴任したのは福岡県の東の端、川向こうは大分県という田園地帯にある教会員が20人に満たない小さな教会でした。任地が決まると会社員時代に通っていた教会の尊敬する信徒の方から、近くに住んでいるある一人の人物を尋ねるよう紹介されました。その方こそ、大分県中津市に在住していた松下竜一という売れない作家さんです。「売れない」という枕詞は松下さんの自称でしたが、『豆腐屋の四季』という作品が緒方拳さんを主演にテレビドラマ化されましたので、ご存知の方も多いでしょう。当時、松下さんは『草の根通信』というミニコミ誌を20年以上に渡って発行しておられ、2000名に迫る多くの読者を得ており、毎月の発送作業をお手伝いすることから始まり、後には松下さんのお嬢さんの結婚式の司式をさせて頂くまでに親しい交わりを頂くに至りました。

この松下さんは、法曹関係者ならばよくご存知だと思いますが、ノンフィクション作家としてだけでなく、日本で初めて「環境権」という概念を争点の柱に据えて裁判で争ったことでも知られています。弁護士を立てずに本人裁判を起こした7人の中の一人で、豊かな自然を有する海岸を埋め立てて火力発電所の建設を目論んだ九州電力を相手に、蟻が巨大な象を相手にするような、誰もが「無謀」というような裁判でした。裁判そのものは負けてしまいましたが、「経済発展」よりも大事なものがあることを世間に知らせる大きな功績を残し、また法曹界に環境権を定着させるきっかけともなりました。その松下さんを通じて、中国電力が計画している上関原発に反対する山口県祝島の皆さんの存在を初めて知り、原子力発電という名の危険な核発電方法の問題点を知ることとなったのです。

30年以上も前のことになりますが、松下竜一さんは、「誰かの健康を害してしか成り立たぬような文化生活であるのならば、その文化をこそ問い直さねばならぬ」と語り、「暗闇の思想」という在り方を提唱しました。犠牲の上に成り立つ豊かさや明るさよりも、たとえ暗闇でもいのちを大事にする方がまだ善いとするという考え方です。松下さんは次の言葉を残しています。

「いうところの『電力危機』が到来するなら、むしろ到来せしめればいいのだ。その時はっきりしてくるに違いないことは、私たち民衆にとって電力危機即日常社会の破局ではないだろうということである。電力不足到来がさして私たちに危機ではないのだとわかれば、危機の正体は、今しきりに危機をいい立てている者にとっての危機だとわかってくる。」

3. 11以後、全国の原子力発電所が停止して、「電力危機」が盛んに宣伝され、関東周辺では計画停電も実施されましたが、実は危機でも何でもなかったこと、利益の消失を恐れ

た電力会社の誇大広告であったことが後で明らかとなりました。福島で生きる人の生命やその重さ、暮らしを守ることよりも、「経済」に名を借りた金儲けを優先する政界や財界の化けの皮がはがされた出来事でした。あさましい限りです。

現代社会では度々、「最大多数の最大幸福」ということが主張されます。「個人の幸福の総計が社会全体の幸福であり、社会全体の幸福を最大化すべきである」という意味で使われ、最大の幸福をもたらすために、少数の犠牲は仕方ないと多くの人が受け止めていますけれども、この言葉を最初に用いたベンサムという英国の経済学者は、個人が幸福を形作り、追求するためには侵してはならない領域があることを前提とし、それを規定するのが法であると考えて、ひとりの個人も侵してはならないことこそが安全であると考えていました。個人の安全が守られないところでの最大利益はないということは皆さんよくご存知のことでしょう。牧師のわたしが言うのは何ですが、「釈迦に説法」かもしれません。ところが今では、民主主義の下、多数決で物事を決定する社会では「寛容」の名で少数者の意見や行動は軽んじられるか封殺され、「最大多数の最大幸福」を優先するための多少の犠牲は仕方ないと考える人が世論をミスリードしています。

聖書の中に「迷い出た1匹のヒツジと残された99匹のヒツジ」という有名なたとえ話があります。99匹を残して、迷い出た1匹を探す羊飼いの話ですが、その中でイエスは「これらの小さな者をひとりでも軽んじないように気をつけなさい」と語ります。少数者を優先して物事を考えていたイエスは、とりわけ、社会の片隅で小さくさせられていた者が大事にされる場所こそが、「天の国」であるということを述べるために「迷える1匹の羊」の例え話をしています。また、イエスの別の例え話に感銘を受けた「インド独立の父」マハトマ・ガンディーは、「わたしは『最大多数の最大幸福』『適者生存』という原理を信じません。人にとっての規定は『すべてのものの幸福』『すべてのものの発展』であり、『弱者優先』です。」という言葉を残しています。

この国の指導者は原発再稼働に当たって、危機を煽ってそれを正当化する言葉をいくつも語りました。不安を強調する一方で、効率や功利に基づき、しかも犠牲を当然とする「最大多数の最大幸福」を求めた「まやかし」の言葉に過ぎず、本当は「最大稼ぎ頭の最大利益」と語るべきです。個人の幸いを無視して守られる国益、公益は決して個人を大事にすることはありません。回復の見込みすら立たないあれだけの被害をもたらしながら、原発の再稼働に舵を切ったこの国を覆い尽くしている経済至上主義。それは誰かに犠牲が生じることを躊躇しないという点で、誤った生き方です。

経済という名の「金儲け」の話はもういいです。大きくなること、強くなること、力に頼ることはもう止めましょう。先にご紹介した羊の例え話の最後で「小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」というイエス・キリストの言葉は、暗闇に輝く光のような言葉であり、わたしたちが当たり前としている価値観を問うている点で新しい視座を与えています。

核発電はウランの採掘から核発電で生じる核廃棄物＝「核のゴミ」の処理に至るまで、

生命を危険に晒し生命の犠牲を伴う技術です。他者の命を踏み台として安楽な生活を送ることは赦されません。ましてや核兵器開発能力の維持が核発電存続の理由であるならば、もってのほかです。核発電を止めることが「平和をつくりだす」ための第一歩であると考え一キリスト者の立場から、四国電力伊方原子力発電所の停止を求めます。